

## 子どもが絵本作りで発見すること

植草 一世<sup>[1]</sup> 植草学園大学発達教育学部  
 馬場 彩果<sup>[2]</sup> 植草学園大学発達教育学部  
 安藤 則夫<sup>[3]</sup> 植草学園大学発達教育学部

### Children will Find the Meaning of Living through Making Picture Books

Kazuyo UEKUSA Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University  
 Ayaka BABA Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University  
 Norio ANDO Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

絵本を作ることは、一つの物語作りである。絵本作りをする中で、子どもは自分の物語を考えることになり、これまでの経験がつながりを持つようになる。そのことによって生きる意味についての発見が得られるのではないかと思われる。本研究では、絵本作りを通じて得られる子どもの気づきや発見に焦点をあて、絵本作りの活動を通して、絵本に表現された意味を明らかにし、絵本作りが子どもの活動に与える影響について考察した。

絵本作りには、人を引きつける大きな魅力がある。これはいくつもの場面が関連し合いながら、まとまりを作る、言い換えれば物語を作るという性質から来ていると思われる。絵本作りによって行われる物語作りは自分の様々な経験を結びつけ、まとめ、記憶の再構成の機会となるとなり、自分の経験の意味を確認する場なのではないかと考える。

キーワード：子どもの絵本作り、物語作り、場面の関連性、経験のまとまり、経験の意味の確認

Making a picture book is sort of like creating story. Through the experience of making their own picture books, children learn to think up of a story by integrating separate past experiences. This activity seems to help them find meaning in their lives. Focusing on children's awareness and discovery, this study revealed the meanings expressed in children's picture books and discussed the impact which making pictures books had on children's activities. Making picture books keeps children absorbed, an absorption that seems to come from binding together related pieces of a scene to create a story. Through making a picture book, children, reorganize their memories, integrate their various experiences into a story, and identify meaning in their experiences.

**Keywords:** Making picture books, Creating a story, Integrating of experiences, Identifying the meaning of experience

[1] 著者連絡先：植草 一世

[2] 馬場 彩果

[3] 安藤 則夫

## 1. はじめに

本研究3人は、それぞれが関係する現場において、絵本作りを行っている<sup>1)2)3)4)5)</sup>。その結果、絵本を読んだり聞いたりすることは、幼児の人格形成や社会性の発達に大きな影響を与えたと考えられた。

それだけでなく絵本作りをする子どもたちは生き生きとし、大人との関わりを楽しみ、充実感が得られる様子が見られた。絵本作りは、他の活動には見られない発見や人との深い関わりを生み出していく力があるのではないかと思われた。

これまでの研究を振り返ってみると絵本作りに関する子どもの活動や学びについて考察した研究はほとんどない。しかし物語作りに関する研究はいくつかある。そこで絵本作りをひとつの物語作りと考えて、今までの物語作りの研究と関連付けて考えることにした。

先行研究では、子どもの発達または発達心理学の立場から幼児の物語作りの研究<sup>6)7)8)9)10)11)</sup>や、また絵本読みをめぐる親子関係や援助者と共に子ども同士の協同作話からの研究<sup>12)13)14)</sup>や、絵本や物語作りはぐくむ要因や条件についての研究<sup>15)16)17)18)19)20)</sup>がなされている。それによると4、5歳ともなると、ごっこ遊びの中で自分なりの“お話づくり”を始めることが観察される。例えば筆者の経験によると、子どもが洗濯バサミを振り回しながら洗濯バサミを空飛ぶ恐竜と見なして飛び回り、そのうちに恐竜が口を広げ襲いかかってきて体や手を噛みつくなどの物語の展開を行っていた。

田島<sup>6)</sup>によると、子どもは、物語を作る上で、①お話づくりを途中で自己チェックする機能が弱い。②お話づくりにおける素材についての知識が少ない。③実験者側の援助的質問に対する応答性が低いという。内田<sup>11)</sup>は、幼児は大人とほぼ同じように物語を作ることができるが、大人よりも簡略な物語になってしまうという。これらの研究は、認知的思考的側面の考察が主であった。

本研究では、むしろ心の成長、特に自己に対する気づきや、自己認識の側面を重視したいと考えている。自分の思いを絵本という作品に表現することで人格形成上、大きな意味があると考え、絵本作りを保育のカリキュラムに加えることが望ましいと考え

た。

本研究者の一人、植草は、平成22年から24年の3年間に行われた植草学園大学開催の公開講座<sup>21)</sup>において、小学生が学生と一緒に絵本を作る実践をしてきた。そこでは子どもたちの嬉々とした様子を見ることができ、絵本作りによって子どもたちが学生との深い交流を経験したと考えられた。さらに植草学園大学附属幼稚園（以下幼稚園と記す）、植草学園弁天保育園の年長児が、バスで大学に来て植草学園大学（以下本学と記す）の学生と楽しいひととき（出合いの会、学内散策、お弁当等）を過ごせるよう計画し、交流の機会を設けるなかで、学生支援による絵本作りを試みてきた。

これらの活動を通じて、子どもの絵本作りが人格形成に大きな影響があると思われた。そこで子どもたちの心に与える絵本作りの影響を明確にしていく必要を感じた。

## 2. 目的

本研究では、幼稚園児が、学生や親の支援を受けながら絵本作りをする中で何が得られるかを解明する。絵本作りの活動の過程や作品を分析し、ここで得られる子どもの気づきや発見の意味を考察する。子どもたちは、絵本作りを通して、何を思い、楽しみ、学ぶかを考え、このような活動によっておこる、子どもたちの内面の育ちを、実証的に検証していく。以上の目的のために、次の2つの研究を行った。

研究1：幼稚園年長児と学生による絵本の表紙作り。  
研究2：幼稚園児とその親による絵本作り。

## 3. 研究1：年長児と学生による絵本の表紙作り

### 3.1 研究1の目的

1. 学生と行った絵本作りの過程に現れた子どもの気持ちを把握する。
2. 子どもの絵本に対する思いを把握する。

### 3.2 研究1の方法

1. 調査対象：幼稚園年長児（5～6歳） 33名

2. 実施日：平成24年7月5日
3. 場所：本学の保育技術演習室
4. 調査の方法：質問紙によるデータ収集（絵本作りの中で、子どもとペアになった学生が子どもに聞き取りを行い調査用紙に記入。①～⑨は4択法、⑩は自由筆記。その場で学生から回収。⑪は、担任教諭が日常の子どもの様子を記入した。回収率は100%）。
5. 質問項目：
  - ①学生と一緒に過ごすことは楽しかったかどうか。
  - ②お話作りが楽しめたかどうか。
  - ③表紙はよくできたかどうか。
  - ④自分らしい絵が描けたかどうか。
  - ⑤完成したら身近な人に読んで（見せて）あげたいかどうか。
  - ⑥また作りたいかどうか。
  - ⑦活動に興味を持って取り組めたかどうか。
  - ⑧学生と一緒に相談してできたかどうか。
  - ⑨絵本以外のことも大学生と活動できたかどうか（出会いの会、学内散策、お弁当等）。
  - ⑩学生から見た絵本作りの様子。
  - ⑪担任教諭から見た普段の様子。
6. データ処理：4択による回答では各回答の割合を百分率で示した。自由筆記による回答は、33枚の回答用紙に現れた回答をカテゴリー毎に集め共同研究者全員で分類して整理した。
  - ・あまり思わない、思わない (8.6%)
  - ・無効 (2.9%)
  - ⑥また作りたいかどうか。
    - ・強くそう思う、そう思う (91.4%)
    - ・あまり思わない、思わない (5.7%)
    - ・無効 (2.9%)
  - ⑦絵本作りの活動に興味を持って取り組めたかどうか。
    - ・強くそう思う、そう思う (84.8%)
    - ・あまり思わない、思わない (3.0%)
    - ・無効 (12.1%)
  - ⑧大学生と一緒に相談しながらできたかどうか。
    - ・強くそう思う、そう思う (78.8%)
    - ・あまり思わない、思わない (12.1%)
    - ・無効 (9.1%)
  - ⑨絵本以外のことも、大学生と活動することができたかどうか。
    - ・強くそう思う、そう思う (90.9%)
    - ・無効 (9.1%)
  - ⑩学生から見た絵本作りの様子。
    - ・意欲面  
自分から積極的に発言し、アイデアなども提示していたという記述があった。具体的な取り組みの様子では、ハサミや糊を巧みに使い、楽しそうに取り組んでいた様子の記述が見られた。
    - ・大学生と一緒に取り組んだ様子  
糊のつけ方など少し適当な部分があるが、一緒に行くことで上手にできた等の記述があった。それは、声かけをすることによって嬉しそうに絵本作りに集中していたこと、絵本の内容を学生に語りながら絵本作りをしていたこと、学生の助言をよく聞いてくれたことという記述で知ることができた。
    - ・絵本に対する愛情  
絵本をずっと抱きしめていたこと、できた絵本を何回も読み聞かせてくれた等の記述があった。
    - ・その他  
表紙はすぐに終わらせようとするとか、絵本作りよりも輪ゴムや糊で遊んでいたことの記述が見られた。

### 3.3 研究1の結果

各質問項目に対する回答率は、次の通りであった。詳しくは、図1を参照のこと。

- ①学生と一緒に過ごすことは楽しかったかどうか。
  - ・強くそう思う、そう思う (100%)
- ②お話作りが楽しめたかどうか。
  - ・強くそう思う、そう思う (100%)
- ③表紙はよくできたかどうか。
  - ・強くそう思う、そう思う (100%)
- ④自分らしい絵が描けたかどうか。
  - ・そう思う、強くそう思う (85.7%)
  - ・あまり思わない、思わない (8.6%)
  - ・無効 (2.9%)
- ⑤身近な人に読んで（見せて）あげたいかどうか。
  - ・強くそう思う、そう思う (85.7%)

①担任教諭から見た普段の様子。

担任記述の「子どもの普段の様子」と、学生記述の「絵本作りの様子」を照らし合わせると、普段は外遊びが好きでお絵かき等は注意散漫なA児が、絵本に興味を持って集中して取り組めた。B児は、イメージ豊かで造形が好きな手先が器用な子で、絵本作りもハサミや糊を巧みに使い楽しそうに取り組めた。C児は感情の起伏が激しい面もあったが、学生の「名人、さすが！」という声かけによって、集中できたことがわかった。また、普段から明朗活発、友人を引っ張って遊ぶのが好きなD児は、できた表紙が気に入った様子で絵本をずっと抱きしめ、絵本を学生に何回も読み聞かせてくれたという。普段はおとなしいE児は学生の声掛けで、積極的に話し嬉しそうに絵本作りに集中した。

3.4 研究1の考察

4 択の質問は、①は学生とともにした出会いの会、学内散策、お弁当等を一緒に過ごすことについて楽しかったかどうか、②から⑦までは絵本作りに対する子どもの気持ちについて質問した。それらを見ると、子どもたちがかなり積極的に楽しみながら学生と共に過ごし絵本作りに取り組んでいる。学生による聞き取りの結果から、「楽しく行うことができた」「お話作りが楽しめた」「表紙はよくできた」「自分らしい絵が描けた」「絵本作りの活動に興味をもって取り組めた」という答えが多かった。この結果から、興味をもって積極的に取り組めたことがわかる。そのことから「身近な人に読んで(見せて)あげたい」「また作りたい」という意見も多く出された。このようによい結果が出てきたのは、⑧、⑨の質問(自由筆記)、「大学生と一緒に相談しながらできた」「絵本以外のことも学生と一緒にできた。」に肯定的な回答が多かったことから、お話作りや表紙作りも学生が関わり、支援したことが有効であったといえるだろう。カテゴリー別の結果をみても絵本作りに対する子どもの意欲・創意工夫や、ハサミや糊を巧みに使い、楽しそうに取り組んだことも結果としてあるが、学生と一緒にすることや学生の言葉掛けによって「さまざまな作業も一緒に行うことで丁寧にできた。」「声掛けをすると嬉しそうに絵本作りに集中し

ていた。」「絵本の内容を学生に教えながら絵本作りをしていた。」「学生の言うことをよく聞いてくれた。」など、学生の支援によって、さらに子どもたちの気持ちが引き出されていることがわかる。多くの子どもたちが、普段の姿とは違った様子で絵本作りに集中している姿が見られた。

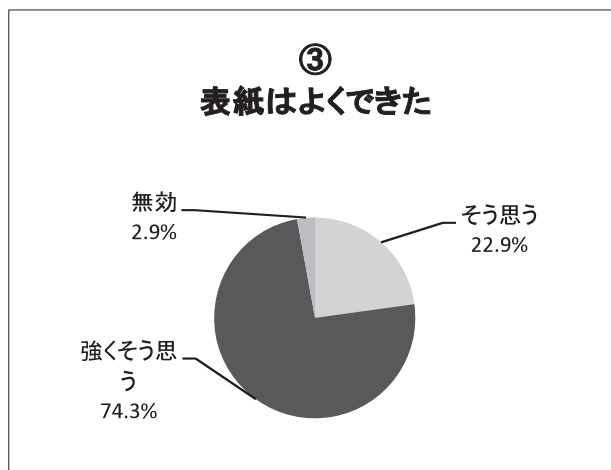
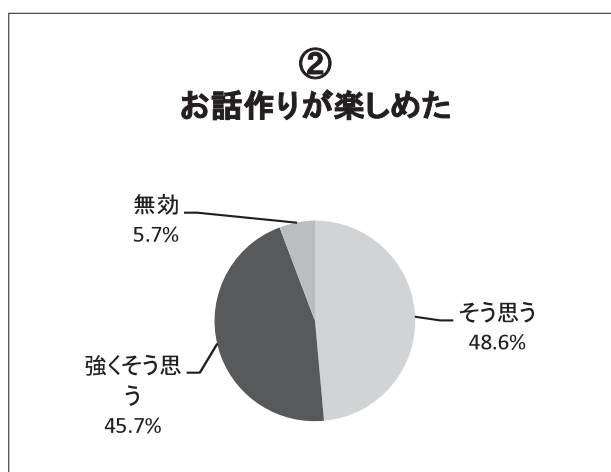
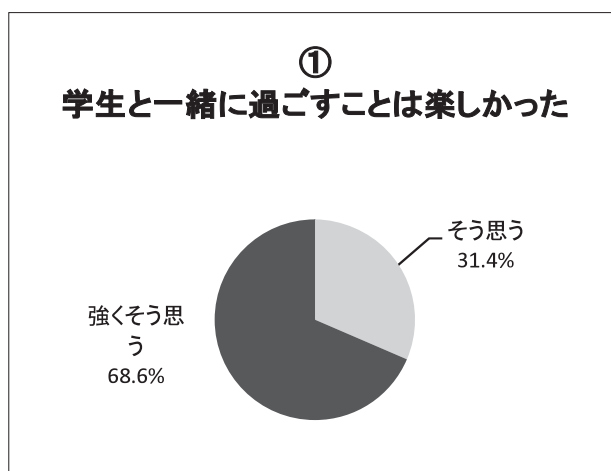


図1 学生とする幼稚園児の絵本作り(次頁へ続く)

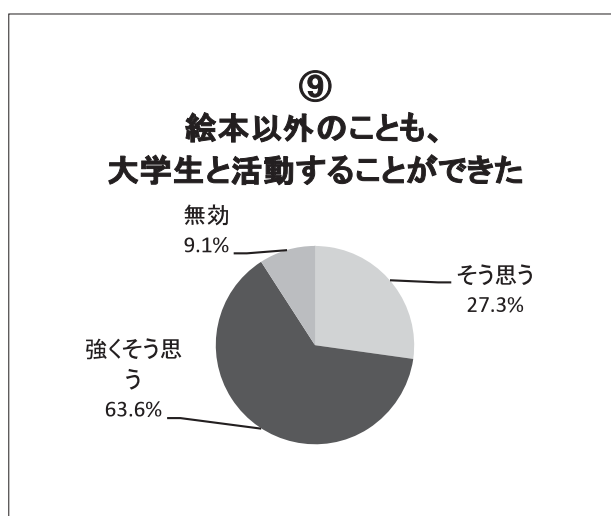
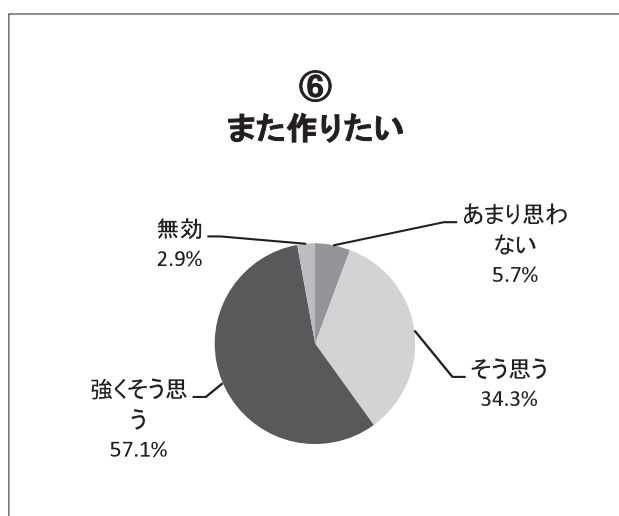
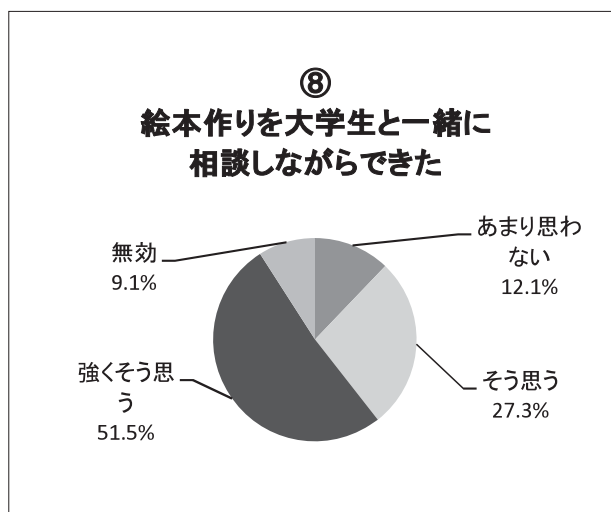
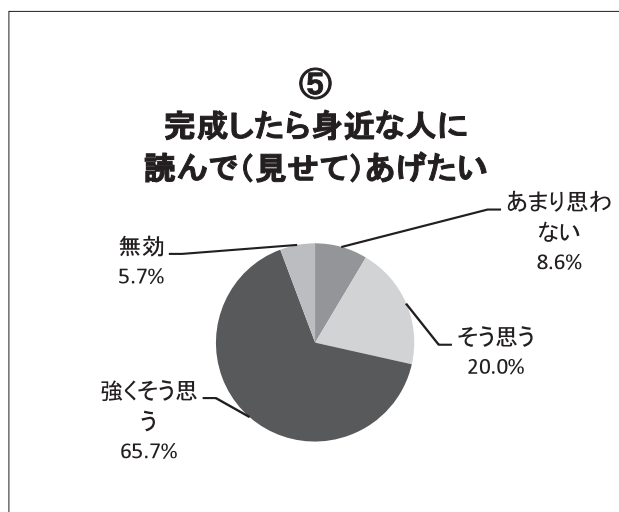
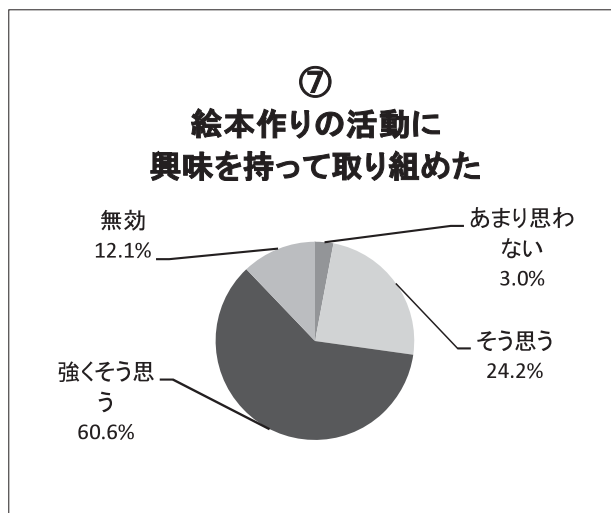
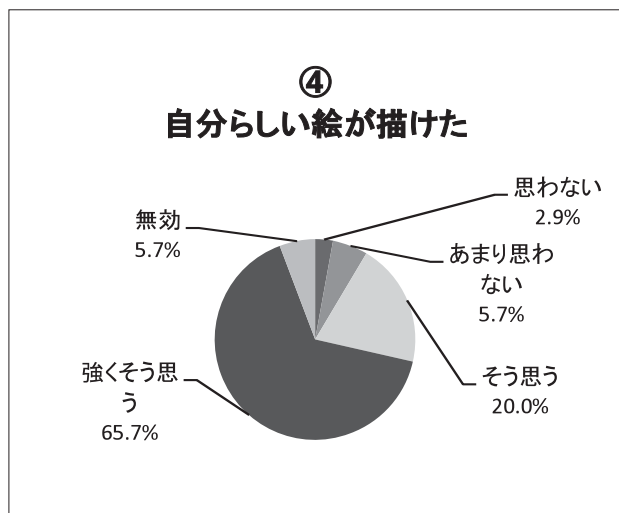


図1 学生とする幼稚園児の絵本作り (前頁の続き)

#### 4. 研究2：幼稚園児とその親による絵本作り

##### 4.1 研究2の目的

1. 子どもが親子で絵本のお話作りやお絵かきをした際の子どもの様子と絵本作りに対する思いを把握する。
2. 親の絵本に対する意識を把握する。

##### 4.2 研究2の方法

1. 調査対象：研究1の幼稚園児とその保護者
2. 実施日：平成24年6月26日
3. 場所：幼稚園および家庭
4. 調査の方法：質問紙によるデーター収集  
(絵本作り後、保護者に配布した質問紙によるデーター収集。実施日から1週間以内の期限を設け幼稚園が回収した。回収率は100%)。
5. 質問項目：①絵本作りの子どもの様子  
②感想。回答は、自由筆記
6. データー処理：カテゴリー毎に集め分類して共同研究者全員で整理した。

##### 4.3 研究2の結果

自由筆記の感想をカテゴリー毎に集め、集計した。回答率、結果は表1の通りである。

表1 絵本作りの子どもの様子と親の感想（複数回答）

項目	件	%
1 子どもの様子		
1-1 楽しく、嬉しく、熱心に、興味、意欲を持って	21	66
1-2 題材、道具、材料の準備	6	19
1-3 期待について	4	13
1-4 親子で絵本を作る、時間を過ごす	18	54
1-5 大学生や教員と一緒にいること	3	9
1-6 周りが気になる、焦る	7	22
1-7 飽きる	3	9
2 親の感想		
2-1 成長（興味関心）への気づき	7	22
2-2 子どもへの支援	8	22
2-3 自分自身について	14	44
2-4 他の親について	4	13
2-5 企画について	14	44
2-6 テーマや内容	5	16
2-7 その他	3	1

##### 1. 子どもの様子

###### 1-1 楽しく、嬉しく、熱心に、興味、意欲を持って

折り紙を切り抜くことや絵を描くよりも、写真や切り抜きを使って楽しく貼っていたことや、逆に写真やシールはあまり使わず自分の描いた絵や字で熱心に仕上げたことの記述があった。ストーリーを2つ考えるなど、内容に力を入れたこと、親は一部手伝ったが、ほとんど子どもが自分で描き、絵本の内容も子ども自身で決めたので、制作中もとても楽しそうにやっていたとの記述があった。その場でアイデアが出たことや思ったよりも絵が描けていたことなどの記述があった。また、しっかりハサミで切り、絵を描き、折り紙を折るなどが上手にでき、とても楽しそうだったことやいろいろアイデアが出ていたことの記述があった。

###### 1-2 題材や道具、材料の準備について

家でいろいろなポーズをとって写真撮影をしたり、お天気が悪い日は「絵本作りの準備をする日」と親子で決めたり、風船のカラーコピーを自分でとったり、目をキラキラさせて嬉しそうにしていた。絵の具で絵を描くことや物をつくることに興味が出てきたり、本屋さんや図書館でたくさんの本をひろげて構想をねったり、写真を選んだり、と準備の段階から意欲的に熱心に取り組む姿勢が述べられていた。題材については、週末に蛍を見たときの様子や、本人が主人公の物語をつくることでとても楽しめた記述があった。

###### 1-3 期待について

前日からとても楽しみにしていたとの記述があった。完成すると「うまく作れた」「家でも絵本を作りたい」「また作りたい」と、家族や友達に見せて嬉しそうに話すことができたとの記述があった。

###### 1-4 親子で絵本を作る、時間を過ごすことについて

前から絵本作りの話を聞いていたので、「どんなのがいいか」と親子で話をしたこと、幼いころの写真を振り返り、とても懐かしく話をしたことや、親子での作業も久しぶりで、楽しく過ごせあつという間に時間が過ぎたことや、子どもと一緒に絵本を作る機会はないので、子どもは嬉しそうだったことなど、親子で協力してひとつのことに取り組むことができた、思い出が増えて絆を深めることができたことの記述があった。

### 1-5 大学生や大学教員と子どもと一緒に絵本を作ること

機会があまりないので期待をする記述があった。

### 1-6 周りが気になる, 焦る

子どもの様子の中には、当日取りかかるまでに時間が掛かり、イメージがわくまでは周りの様子を見たりしてなかなか作業に集中できなかったこと、事前に考えたお話を何度も読み返して満足げな様子であったのに当日は、しきりに周りの友達を気にしている様子で、自分の作業が進まなかったこと、「何を書いたらいいの?」と私(親)に聞き、自信を持って書けず、前日に考えたお話も「やっぱりこれやめる」と言っていたこと、周りの子が気になって、他の子の作品を真剣に見ていたこと、始めはモジモジしていて、なかなか作業が進まなかったことの記述があった。しかし、自分のやりたいことが見つかり集中できたこと、集中してからは自分の世界でストーリーを作っていた。また白紙に自分で物語を作っていくイメージがわからない様子だったがテーマが見つかったからは、どんどん話が出てきたこと、終わりの時間近くになりやっと集中して絵を描き始めたこと、の記述があった。

### 1-7 飽きる

始めは集中していたが、飽きてしまい、ページのうしろの方は少しずつ雑になった、あまり積極的に取り組んでくれなかった、親と一緒にになると甘えて自分で考えない様子であったことの記述があった。

## 2. 親の感想

### 2-1 成長(興味関心)への気づき

絵本作りはとても難しいと感じ、お話のイメージもできなかったが、子どもは考える力があることを発見した。親が子どもの表現の仕方に驚いた。子どもは作りながら新たな話を思いつきアイデアが次々出てくること、お話を作ることができるようになったと、娘の成長を感じることができたこと、子どもたちの想像力や発想力に驚かされ、成長を感じたこと、日々の経験や見たもの、聞いたことが、きちんと実になり役立っているのだということ、真剣に取り組んでいた様子や親の案を聞かずに、自分で考えてオチまで作れたこと、子どもの意外な部分に気づいたこと、子どもがすすんで文章を考え、絵を

描き、親よりも想像力があることに驚いたことの記述があった。

### 2-2 子どもの支援の仕方について

「子ども主体」の活動を実際に行って、その難しさを改めて自覚したとか、子どもはお話を考えることが好きなので、そこに少し話をふくらませてあげて作っていったこと、絵は本の中から一緒に楽しみながら探せたとかの記述があった。また前もって子どもと相談すると親の力が入ってしまい、親が手をかけてしまうので当日の朝、写真のコピーの中からどれがいいと聞いて「これ!」いうのを切り取った。そして、子どもに貼らせ「これ迷路」「車走らす」など、おもしろい話になったので、あえて用意するのではなく、ぶっつけ本番でよかったと思うなどの記述があった。いろいろもっている子どものアイデアを活かして伸ばせるような環境もこれから作っていきたい。子どもと一緒に親も成長していきたいと思うことの記述があった。

### 2-3 自分自身について

何を書けばいいのか親自身とても不安だった、できるのかと不安だった、りっぱな作品を作らないといけないと気負ってしまった、短い時間の中でしっかりしたものを作ろうとあせったことの心情が述べられていた。また、親として事前準備が足りず、当日子どもが思うように進まなかったこと、事前準備も周りに比べて足りなかったこと、他の子の親はこのような作業が得意のようで、自分たちの絵本を見せるのが少しはずかしい気持ちになり、母として申し訳ないとかの反省の記述があった。

### 2-4 他の親について

持ってきた記事をただ切って、写真を大量にカラーコピーしたものを子どもが言われるまま貼っていたことに対して、親がほとんど考えて作らせて、親の自己満足ではないかと感じた。子どもにはもっと自分で絵や文字を書かせた方がいいと思う。テーマの決め方が自由だったせいも、子どもより親の方が焦ってしまい、中には親がメインで取り組んでいる様子も見受けられたなど、子どもが主体とならず、色々用意し、家で切り、描いてきたものを当日貼るだけという人と、当日になって考える人とのとりかかりの差が大きかったこと、なんとなく記念に残るものを作成したいという親の気持ちが強かったよ

うに思えたとの記述があった。

## 2-5 企画について

絵本作りをする機会は、新鮮で楽しい時間を過ごすことができたこと、とても良い企画だと思ったと肯定的な感想があった。また、準備の段階で先に作品の見本を見ることができて参考になったこと、絵本の見本をじっくり手元で見られる余裕が欲しかったこと、資料、見本、セットを早く見たかったこと、事前の進め方についての意見があった。講座の進め方や内容については、事前に物語をある程度考えておくとか、幼稚園の保育中に親の支援なしで絵本作りを開始し、親との時間は貼ること、絵を描くことにする等の進め方に工夫が欲しいとの記述があった。

## 2-6 テーマや内容

テーマがなく、むずかしかったという記述があった。絵に子どもの小さい時の写真をカラーコピーして貼るのはよいが、“絵本作り”ではなく子どもの成長日記みたいで違和感があった。中身が自由であるのに対して、外側を服等でくるむことに違和感があったことの記述があった。

## 2-7 その他

制作時間が短かった。時間の経つのが早く思うように作業が進まなかった。家で考えたものを子どもだけで作るのはムリがあると思ったので1時間のなかでかなり必死に作り、2回にわけて完成できたら余裕をもって当日も楽しめた。持ち帰りで作してもよくなったので、続きを自宅でゆっくりと親子で相談しながらできたのがとても良かったなどの記述があった。「本当に疲れた」「大変だった」、下に兄弟がいるので、ほとんど一緒に作るができなかったとの記述があった。写真に写っている昔のオモチャやコップなどをひっぱり出して遊び思い出にひたる時間となり、ねむっていたオモチャやぬいぐるみが復活していることの記述があった。子どもの幼稚園での様子が見られて安心したことの記述があった。

## 4.4 研究2の考察

本研究者は、今回の親子での絵本作りの感想が、他の講座<sup>2)21)</sup>では経験をしたことのないものであったことに驚かされた。例えば、「事前にもっと準備が欲しかった。」「時間が足りない。」「できるだろうか。」

という立派な作品を作りたいという気持ちが表れていた。親たちは、絵本は「立派な物」であり、「完結、完成」しなければならない、という共通のイメージを持ったようである。絵本作りに期待感をもって臨んでいるということを示しているといえるであろう。

一方、「楽しみである」という期待がある反面、「不安である」という親自身の心情が述べられていた。それは、「子どもができるだろうか」「立派な物ができるだろうか」「完成するだろうか」という心配・不安に分けることができた。絵本は、個々のエピソードを関連づけながらまとめる、物語性のある作品であるために、真剣に打ち込まなければ完成しないという意識を親が抱いたのではないかと思われる。また、そのような作品を子どもが作れるだろうかという不安が、親の心にわき上がったのではないかと思われる。しかし、結果として親は、お話作りにおける子どものアイディアの豊かさや発想力、成長に驚かされることになった。

端からは子どもに貼らせているだけの作業に見えても、親子で話し合い、親子だけが共有する思い出に浸りながら意欲を持って取り組んでいることがわかった。親だけでなく子ども自身も絵本作りで得られるドラマ性に引きつけられたせいではないかと考えられる。絵本を作る時には、まとまりのなかった経験を関連づけてまとめるという物語作りの要素がある。ストーリーやドラマの展開を行うので、物語作者のように次々と展開される筋に興味を集中させる醍醐味がある。親たちは、物語作りの魅力にとらわれて立派な作品を作ろうと努力することになる。その結果、「大変だった」「苦しかった」という感想も現れてきたのではないかと考察される。親子での絵本作りでは、絵本作りに対する要求水準の高さを推察することができた。

## 5. 考察

今までの物語研究では、幼児がどの程度物語を理解し作れるかという認知的な側面に注目したものであった。しかし物語作りには情緒的側面が備わっている。Basting, A. D.が創始した「タイムスリップス」<sup>24)</sup>は、認知症の高齢者用のプログラムであり、



参加者が自由に思いつきを語りながら物語を作っていく活動である。精神的な働きが衰えた高齢者であっても、自由に物語を作ることによって、生き生きした表情を示すようになり、人とのコミュニケーションを楽しむようになる。物語作りには人の心を活性化する力があると考えられる。今回の研究でも子どもたちは、絵本作りに強い興味を示し活動を楽しめた。また、子どもだけでなく親も真剣に取り組む様子を示していた。しかし支援者である親や学生には、事前に関わり方について指摘しなかったが、結果として学生は支援的、応答的であり、親は干渉的、先導的な傾向があった。絵本作りに関しては支援者がどう関わっていくのかを解明していくことが、今後の課題である。

Nelson, K.<sup>22)</sup> は、子どもに自己を物語りたがる強い動機が内在しているという。そのために、子どもたちは今回のような絵本作りにも強い興味を持つと考えられる。そして Bruner, J. S. and Lucariello, J.<sup>23)</sup> は物語ることが思考なのであり、物語るということは単なる体験的記憶の再生とは異なると述べている。

物語作りは、個々の体験的記憶を物語としてまとまりを作ることにつながる。その過程で子どもたちは記憶の再構成を行い、自分の経験や絵本表現の意味を確認する。言い換えれば、子どもたちは自分を再発見していると言えるだろう。田島<sup>19)</sup> の言うように、物語るということは、子どもの精神的発達全体に大きな意味を持つのである。

絵本作りには、人を引きつける大きな魅力がある。これはいくつもの場面が関連し合いながらまとまりを作る、言い換えれば、物語を作るという性質から来ていると思われる。絵本を作ることでばらばらに存在していた経験やアイデアが結びつき、まとまりをもつようになる。これは自分がやってきたこと、考えてきたことなどの経験の意味の確認ともいえる。今まで生きてきたことへのまとまりのある意味づけや意味への気づきを促すことにもつながる。人間は生きる意味を求める存在<sup>25)</sup> であり、そのために子どもも親も絵本を作ることに価値を感じ、興味を膨らませたとと思われる。

絵本作りによって行われる物語作りは、自分の生きる意味を発見する手立てとなるものと考えられる。制作者の人間性や心が明確に現れる場なのである。

このように考えると、保育の場に絵本作りの活動がもっと導入されたほうが良いと思われる。そのためにも絵本作りがどのように子どもの生活や成長に関わっているかについて、これからも研究を続けていくことが大切と考える。

## 6. おわりに

絵本作りが、子どもたちの成長に意味のあるものであることがわかり、このような活動が増えることが望ましいと考える。保育者を目指す学生がこのような活動に立ち会うことで、得るものも大きいと思われる。保育者養成にとって子どもとともに作る絵本の素材を含め、その有効性や学生の学びについてもこれから解明していく必要がある。

## 7. 倫理的配慮

アンケート調査はすべて、それが研究調査の対象であり、研究成果として公表する可能性があることについて了承を得たうえで行った。個人情報には十分配慮し、個人が特定できるデータは載せていない。本大学研究倫理委員会の承認を得ている。

## 8. 謝辞

本研究を進めるにあたり、植草学園大学附属弁天幼稚園の園児、保護者の方、先生方に多大なご協力を得た。記してここに感謝いたします。

なお本研究は、JSPS科研費 24653255と、平成24年度植草学園大学共同研究費の助成を受けたものである。

## 9. 文献

- 1) 植草一世. 千葉市生涯学習センター子育て支援講座 (<http://chiba-gakushu.jp/>) 2007, 2008, 2009
- 2) 植草一世. 小・中・高校生のための絵本作り. 植草学

植草 一世 他：子どもが絵本作りで発見すること

- 園短期大学公開講座  
(<http://www.uekusa.ac.jp/>) 2002, 2007
- 3) 植草一世・木下勝世・安藤則夫・馬場彩果. 植草学園  
大学共同研究. 2012
  - 4) 植草一世. ぞうのパオ. 手作り絵本館. 2008
  - 5) 植草一世. うさぎのピア. 手作り絵本館. 2009
  - 6) 田島啓子. 物語能力の発達—幼児期から青年期に  
かけて何が発達するのか—日本女子体育大学紀要.  
2003; 33: 91-99
  - 7) 田島啓子. 物語づくりと子どもの発達—物語づくり  
能力の発達上の位置づけ—. 日本女子体育大学紀要.  
2000; 30: 97-107
  - 8) 田島啓子. 物語り方の発達—幼児の作話技法につい  
ての発達心理学的分析. 日本女子体育大学紀要.  
1996; 26: 79-90
  - 9) 田島啓子. 幼児の想像力を育てる条件とは何か?—  
作話能力に影響を及ぼす環境因子について発達心理  
学的分析—. 日本女子体育大学紀要. 1992; 22: 59-70
  - 10) 田島啓子. 想像のお話づくりの発達と教示の効果. 母  
子研究／真生社会福祉研究所 (編). 1986; 7: 12-22
  - 11) 内田伸子. 幼児はいかに物語を創るか? . 教育心理学  
研究. 1982; 30(3): 211-221
  - 12) 田島啓子. 作話に及ぼす幼児と援助者の社会的相互  
作用の影響. 日本女子体育大学紀要. 1998; 28: 69-68
  - 13) 田島啓子. ファンタジー創作における子ども同士の  
協同作話経験の効果. 母子研究／真生社会福祉研究  
所 (編). 1987; 8: 22-33
  - 14) 田島啓子. 絵本読みをめぐる母と子のやりとり. 日本  
女子体育大学紀要. 1990; 20: 95-102
  - 15) 植草一世・西村正司. ロール・プレイングの発見的側  
面を絵本にする意味Ⅱ. 日本心理劇学会. 2010
  - 16) 植草一世・西村正司. ロール・プレイングの発見的側  
面を絵本にする意味Ⅰ. 日本心理劇学会. 2008
  - 17) 田島啓子. 物語づくり能力をはぐくむ環境—物語づ  
くり能力の規定因—. 日本女子体育大学紀要. 2001;  
31: 29-39
  - 18) 田島啓子. 幼児の作話能力発見を支える援助の条件  
に関する分析. 日本女子体育大学紀要. 1994; 24: 89-  
100
  - 19) 田島啓子. 物語創作能力を育てる条件とは何か? . 日  
本女子体育大学紀要. 1993; 23: 87-98
  - 20) 村瀬俊樹. 幼児期におけるスク립ト的知識と物語  
作りの関連性. 島根大学法文学部紀要. 1986; 1: 37-  
51
  - 21) 植草一世. とっても簡単手作り絵本 (学生と一緒に).  
植草学園公開講座  
(<http://www.uekusa.ac.jp/>) 2010, 2011, 2012
  - 22) Nelson, K. Emergence of autobiographical memory at  
age 4. *Human Development*, 1992; 35: 173-177
  - 23) Bruner, J. S. and Lucariello, J. 1989 Monologue as  
narrative of the world. In K. Nelson(Ed.), *Narrative  
from the Crib*. Harvard University Press
  - 24) Basting, A. D. *Forget Memory: Creating Better Lives  
for People with Dementia*. 2009. The Johns Hopkins  
University Press. USA
  - 25) V. E.フランクル. *生きる意味を求めて*. 春秋社. 1999